

萬噺（よろずばなし）

最近、新聞が霞んで見えるようになった。ついに我が家の部屋の中までPM2.5が侵入してきたのか？いや。部屋ではなく、頭の中に侵入したのかと思ったが、侵入したことより、頭の中にそんな隙間が出来てしまっていたことが、残念でならない。ふと、時計を見ると、午後2時半。噺が出来過ぎである。そんな訳はない。単なる（認めたくない）老眼なのだ。そこで気になる「老眼」について自問自答してみた。

そもさん「老眼とは如何に」

せっぱ「人生修行の賜物が如し」

解釈：積年の人生修行により、物事が仔細に見えることなく、意図することなく、大局的に見る事が出来るようになった（見える）ことを表し、それでも、仔細に拘泥するのは未達の証拠である。→「見るべきものでない」→「見なくてよい」→「見ない」→「気にならない」→「知らない」→が進路で到着点は現世にはない。

見えなくなったのではなく、全体的に見渡せる様になったことか、悲観しなくてよい。あくまで通過点。と自分に都合よく全く恣意的に解釈している。これが「聞こえない」となると、話がややこしい。「ウソつき」が「ウソつき」に「ウソつきだ」と訴える。そんな話が気になる様では、まだまだ人生修行が足りない証拠。もう関わらない。

よい話。最近「いいな」と思ったこと。それは「スコープ三味線」だ。TVの画像でしか見てないが、「ああ、これいい。最高」と直感的にそう思った。ご存じない方に説明しよう。金属製の四角いスコープ（主たる用途は雪かき）を三味線に見立て、撥は栓抜きで代用したもの。BGMで流れる津軽三味線の曲に合わせて、いかにも今これを演奏しています。といった風情でそのフリをしている。所謂エア津軽三味線である。撥をスコープの金属部分にパーカッションに打ち当てて、小気味よいリズムを刻み、録音または再生時にかき消されたであろう撥が弦に当たる周波数帯域を見事に、それを以って再現・補完しているのである。そして、演者の演奏に集中・陶醉している表情が、純朴かつとてもよい雰囲気的一所懸命さを醸し出していた。音を楽しむ。まさに、これが音楽の一つの極みだ。

もう一つ。いいなあと思ったのは、「スリッパ卓球」である。卓球を究めた方、今究めようと懸命に努力される方には申し訳ないが、その方の肩を解すようなのん気さである。楽しみ。楽しさ。通常のラケットでは味わえない、思い通りにならないズッコケたやり取りがこの「スリッパ卓球」の神髄である。勝負を全く度外視して、どれだけラリーが続くのかやってみるとお互いの優しさ、思いやりがどれだけ出るのかか、なんだかいつもと違う変な気分になるやりとりである。あれ？これ何かに使えないか？あれ？使えるよ。